



こちらはもう一つの近隣の小学校、報徳小学校の実習での「田植歌」。実はこの報徳小学校のこの田んぼは、二宮尊徳が捨て苗を植えて育てた、いわば「伝説の田んぼ」。こちらは、田んぼ、あやめ、紫陽花、小田急線、富士山が一枚の写真におさめられる絶好の写真スポットの上、この日は「早乙女」つきの絶景。



桜井小学校の田植え実習で「田植歌」を披露。毎年こうして近隣の小学校の田植え実習に出張し、子ども達が田植歌に触れる機会をつくっている。桜井小学校の田んぼは酒匂川沿いにあり晴れていればバックに富士山が見える。思わず、電線や建物などなかったであろう昔の田園風景を思い浮かべる。



様子を見にきてくれたお孫さん。自慢のお孫さんなのは、この表情を見ればわかります。かわいい「早乙女」の衣装は、各自の手づくり。

記憶は薄いという。そのため、数少ない文献や、録音を頼りに、年々一回の「小田原民俗芸能保存協会後継者育成発表会」や、地元の小学校の田植授業での実演、講演会などの活動を行ってきた。

取材の緊張が解けていつものおしゃべりに花が咲き出すと、話題は前都知事の時事ネタから、ご近所の情報、はたまたまた市政に関する鋭い提言など変幻自在。しかも、すべて笑い話にしてしまうので、誰かが口を開くたびに爆笑の嵐。

この地域に残る歌を保存することに意義を感じ取り組んでいるとはいえ、実際にお聞きした保存活動には苦勞も多い。しかし、こうして明るく取り組んでいるのは、もしかしたらこの楽しいおしゃべりの時間が、みなさんにとってそんな苦勞をまぎらわせてくれる「仕事歌」のような時間なのかもしれない。そう思うと、あふれる笑い声の中で、本当に頭がさがる思いだった。



「栢山田植歌保存会」会長の柏木文子さん。ご自身は農家ではないが、この「栢山田植歌」を地域に残す意義を胸に、活動されている。関係各所との調整や交渉など、柏木さんのご苦勞は絶えない。それでもこの会がいつも明るく楽しいからみなさんが練習に集まってくるのだろう。

「栢山田植歌」は、御殿場に残る田植歌の影響が強いと言われている。「栢山田植歌」の始まりの時代こそ定かではないが、御殿場は江戸時代に小田原藩領だった時代があり、小田原との経済交流も盛んで、人の行き来が行われていた。御殿場は高冷地で田植えの時期が5月初旬と早く、5月下旬に田植えを行う栢山や曾我とは田植えの時期がずれるため、明治期から昭和40年代はじめまで、御殿場の「早乙女」が出稼ぎにやっていたようだ。その早乙女たちが、御殿場の田植歌を伝えたのではないかとされている。その後田植え機の普及とともに、早乙女の出稼ぎもなくなり、田植歌が田んぼで聞かれることもなくなった。

その栢山の田植歌の元になった御殿場地方の田植歌は、その昔、小田原藩稲葉氏から領内の村々へ、田植の際の、田祭的な派手な歌舞音曲（カブオンギョク）禁止の指令があったた

め、もともとは田遊び神事であったものが変化した。そのため、田の神である太陽を迎える歌・朝歌・昼歌・晩歌・田の神送りなど古式を守った歌詞が伝わっており、歌詞も五七調を基本とした非常に古いタイプの田植歌と言われている。なぜ御殿場にはこのような古い田植歌が残ったのかというと、それには様々な地理的要因が複合的に重なり、ことごとく外部からの流行などを遠ざけ、その結果、新しい変化に影響されることが少なく、この古い歌が保存されてきたと考えられている。一方、「栢山田植歌」の特徴も、仕事歌にもかかわらず「ヤーノ」という囃し言葉があり、これもやはり豊作祈願で行われる民俗芸能の「田植え踊り」や「田楽」の中で歌われる歌の特徴で、御殿場の影響がうかがえる。余談だが、神事である「田楽」の方は、その後、田楽→猿楽→能楽・狂言と舞台芸能として発展し、今日に至っている。

参考文献：「ふるさとの歌—駿河・伊豆の仕事歌・祝い歌—」佐藤隆 著



「栢山田植歌保存会」
会員募集中！

小田原市文化財課
0465・33・1717

出演情報

平成28年度

小田原民俗芸能保存協会

後継者育成発表会

2016年11月13日(日)

小田原市民会館大ホール

詳細は、お問合せください。
お問合せ：小田原市文化財課
0465・33・1717